

高校
一年生

第一
学期
実力
テスト
【国語】

六〇分

* 解答用紙提出先 → 濱野先生

* 提出先アドレス

濱野先生 → tenshirohamano@rikkyo.uk

I

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現代の私達は、一般に、西洋的な音楽を耳にする機会が多い。だが、少し好奇心をもてば、実に様々な音楽に触れ得る状況にある。これは、現代という時代の文化の極めて特徴的な状況だ、と言わねばならない。二世紀前のヨーロッパに遡って考えてみれば、当時の人々は——聴衆にせよ音楽家にせよ——、自分の属する文化（地域的にも時代的にも）の中の音楽以外の音楽については、ほとんど何も知らなかったし、真剣な関心を払うこともなかった。しかし、十九世紀末から二〇世紀へと加速度的に進展した音楽史学によって、かつては図書館の中の古文書に過ぎなかったような遠い時代の音楽が、今日では、生き生きしたものであるとして演奏され、人々の音楽生活の一部に入っている。

a、それと同時に、非西欧諸地域の急速な西欧化の副産物として、そうした諸地域の伝統音楽の存在と美的価値が、西欧諸国でも大きく認められるようになる——音楽生活は、時間的にも地域的にも大きな広がりをもち得るようになってきたわけである。明治以来、西欧化を推進して、近代西欧音楽を絶対的価値のように見做^{みな}してきた日本の音楽状況にも、このような西洋の音楽事情の変化が反映する。西欧の文化的趨勢^{すうせい}が非西欧諸文化の重要性を認める方向を見せるようになるにしたがつて、「邦楽は劣つたもの」という劣等感^{じゆうとうかん}は消えてゆき、また、他の諸地域の伝統音楽への耳も開かれてきている。つまりはこれが、現代日本の作曲家が置かれている音楽環境なのである。

しかし、⁽¹⁾私は、作曲をするとき、こうした状況を意識したことはない。というのも、私の作曲の出発点としての問い——どのような音が、どう音楽に成り得るか——は、私を取り巻いている既存の諸音楽のどれかひとつから導き出されたというようなものでもなければ、現代の複合的音楽環境から必然的に生じてくるといったものでもないからである。実のところ、この問いそのものは、音楽というものからも切り離し得る。これは、詩人ならば、「言葉というものはどう詩になるのか」、あるいは、画家ならば、「色彩というものはどう絵画になるのか」と問うのと同じことだ、と言つてもよい。したがって、この問いは、言わば、音楽というものの外に立っており、それ故に、どのような特定の種類の音楽伝統に属するものでもなく、あらゆる種類の音楽に対して中立なのである。そして、こうした性質の問いを、私が具体的な音楽の作曲として実践してゆけば、まさにこの問いそのもの

のが中立であるが故に、私の音楽環境に在った諸音楽からの無意識的な影響が、結果的に、箇々の作品に何らかの形で映ることは ^(ア) サマタげられない。 b、私が作曲する曲には、私の音楽環境が映ることになるのである。それは、環境の中で生きる人間にとつて極めて当然のことだ。 ⁽²⁾ 花は土の影響を受けて育つ。

「伝統とは何か」と ^(イ) タズねられるとき、私はいつも、私にとつての伝統は、この土としての音楽的環境である、と答えることが多い。つまり私は、作曲に於いて、伝統を意識したことはないのである。

人々はよく、西洋の伝統・日本の伝統、といった言い方で話をし、そして、音楽家達は、洋楽・邦楽の対立を論じる。勿論、西欧の伝統音楽と日本の伝統音楽は、美的にも構造的にも、あらゆる点で遠く隔たった、二つの別の世界の音楽で、その相違を一種の比較文化論として論じるのは興味深いことであるに違いない。多くの作曲家達もこの論議に関心をもち、それぞれ自らの音楽実践によつてその問題に答えようとしている。そうした作曲家達は、一般に、洋楽と邦楽のそれぞれから、伝統的に保たれてきた音楽要素を ^(ウ) チュウシュツじ、双方の要素を混ぜ合わせたり、並置したりすることで、折衷的、または、混合的な音楽様式を産み出そうとしている。すなわち、その作曲に於いては、一方に西欧の伝統音楽というモデルがあり、もう一方に日本の伝統音楽というモデルがあつて、それぞれのモデルから何らかの要素が引き出され、組み合わせられるわけである。

こうした和洋融合の方法そのものの ^(エ) ゼヒは、私には判断できない。ただ、少なくとも私には、そうした作曲の姿勢からは、これまでのところ、真に興味深い音楽は何ひとつ生まれていないように感じられる。和洋融合の作曲といつても、個々の作曲家の和洋の要素の捉え方や扱い方の違いによつて、現実には種々の様式がある——或るものは洋風化された邦楽のように響き、或るものは和風の味付けをされた西洋音楽（保守的なものにせよ前衛的なものにせよ）に聞こえる。 c、結局のところ、 ⁽³⁾ それは「融合」というよりも、邦楽の洋楽的「改善」か、西洋音楽の民族主義的装飾でしかない。それらは、適度の目新

しさや民族（民俗）趣味——西洋の聴衆から見れば、異国趣味——によつて、それぞれの音楽の聴衆に ^(オ) カンゲイされるだろう。ただそれは、真に新たな音楽というよりも、むしろ、既存の音楽のモデルに少し異なつた衣を着せただけのものだ、と言うべきだろう。

私は、既存の音楽をモデルにしてそれに自分なりの改善や味付けを加える、という姿勢には興味がない。したがって、特定の伝統音楽を自らの「伝統」として意識的に対象化する必然性もない。或る「伝統」を自らの基盤として対象化した瞬間から、人はその「伝統」を護る立場に置かれることになる。何かを護るという思想からは、真に新たなものは生まれない。創造は、根源的な問いからこそ為され得る。それが私の姿勢である。

現代的な X の可能性や、日本的な Y の可能性が問題なのではない。現代に於ける Z の可能性こそが問題なのだ。それが日本的であるかどうかを考える必要などない。現代日本の土に育つ音楽は、いずれにせよ現代日本的になるのだから。

(近藤譲『音を投げる』による)

問一 傍線部(ア)のカタカナを漢字に改めよ(楷書でいいいに書くこと)。

問二 空欄a cを埋めるのに最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。(ただし、同じものを二度以上用いてはならない。)

1 つまり 2 そして 3 ところで 4 ただし 5 しかし

問三 傍線部(1)「私は、作曲をするとき、こうした状況を意識したことはない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1 特定の音楽を参考にして作曲すればその曲と似たような作品になってしまうので、多種多様な音楽に触れて、偏りのない立場で作曲を手がけたいと考えているから。

2 西欧の伝統的な音楽について詳しく知ってしまうと、それが無意識的に自分の作曲に影響を与えてしまい、日本的な音楽を生み出すことができなくなってしまうから。

3 筆者は特定の伝統音楽の要素を生かして作曲しようとは考えておらず、音と音楽の関係を根本的に問い詰めた結果を曲

に反映させてゆく作曲方法をとっているから。

4 特定の伝統音楽を深く研究してしまうとどうしてもその形式に縛られてしまうことになり、その他の伝統音楽の要素を取り入れることができなくなってしまうから。

5 さまざまな伝統音楽を研究するだけでなく、言葉と詩の関係や色彩と絵画の関係などを考察することによって、はじめて斬新な作曲が可能になると考えているから。

問四 傍線部(2)「花は土の影響を受けて育つ」とあるが、筆者はこの比喩的表現(「たとえ」)で「音楽」に関してどのような考えを示しているのか。本文に即して句読点とも七〇字以内でわかりやすく説明せよ。

問五 傍線部(3)「それは『融合』というよりも、邦楽の洋樂的『改善』か、西洋音楽の民族主義的裝飾でしかない」とあるが、筆者はここでのどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1 和洋融合による作曲の方法によつて、伝統音楽の欠点を修正することは可能だが、いずれにしても邦楽か洋楽どちらかの特色が色濃く表れた作品になるということ。

2 和洋融合による作曲の方法によつて生み出されるのは、ある種の音楽に別の要素を付加したものでしかなく、まったく新たな音楽が生まれることにはならないということ。

3 和洋融合による作曲の方法によつて生み出される音楽は、新しい要素が吹き込まれることで音楽的価値は高まるが、伝統音楽の限界を超えることはできないということ。

4 和洋融合による作曲の方法によつて生み出された音楽は、一見して新しい印象を与えるが、実際は素人の興味を誘うだけの大衆的な音楽にすぎないのだということ。

5 和洋融合による作曲の方法によつて生み出される音楽は、両者の要素が真に融け合った作品ではなく、両者の要素が主張し合う統一性のない作品になってしまうということ。

問六 空欄X Y Zを埋める言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1	X	音楽	Y	創造	Z	洋楽
2	X	洋楽	Y	伝統	Z	邦楽
3	X	邦楽	Y	洋楽	Z	音楽
4	X	創造	Y	音楽	Z	伝統
5	X	伝統	Y	邦楽	Z	創造

問七 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 日本の伝統音楽の古びた要素を努めて排除していくことによつて、日本の音楽の新しい伝統を築くことが可能になる。
- 2 西欧や日本の伝統音楽よりも他の地域で生まれた新しい音楽が次第に注目されつつあるのが、今日の音楽環境である。
- 3 洋楽と邦楽を比較する方法では両者の実質的な相違は明らかにできないので、比較文化論は不毛な試みだといえる。
- 4 伝統を抛り所とすれば自ずとその伝統を擁護しようとする心理が働いたため、新しいものを生み出すことが困難になる。
- 5 これからの日本の作曲家達は、西欧の伝統音楽を絶対視することなく、日本的な音楽にならないようにすべきである。

II

次の文章は、南木佳士「洗顔と齒磨き」の一節で、語り手は週末の休みを利用して登山を計画し、(注1) 八ヶ岳に来てい。
これを読んで、後の問に答えよ。

翌朝は六時に小屋を発ち、ゆるやかな路を夏沢峠に向かった。早朝の針葉樹林は冷えびえと静かで、出会う人もなく、小鳥の
声と我が身を運ぶ足音だけを、入るがままに耳に受けつつ峠まで登った。

一息入れるために、すでに閉鎖されている山小屋の前のテーブルにザックを置いたら、表面に薄く霜が降っていた。一度、ゆつ
くりつばを飲んで気持ちを落ち着けてから見上げると、目の前に硫黄岳がそびえている。というよりも、この大きな山は近いと
ころからでは全容が見えず、登ってゆく路が広い山腹にジグザグに刻まれている、その様子が眺められるのみなのだった。

下を向き、ただ体重を左右に移動させつつ足を前方に出す。地は蹴らない。(注2) そつと足底を置いてゆく。そこにからだを乗せる。
そうやって、しずしずとからだを運ぶ。

途中、立ち止まって見渡すと、朝陽を受けて銀白色に輝く尖った峰があつた。(ア) 素人目にも、それが(注3) 槍ヶ岳なのだと知れた。
うわー、と声を出し、(注3) ヤッケのポケットからカメラを出す、この寒気と澄んだ光はフィルムに定着されるはずはないな、
とあきらめながら、記録のためだけの写真を撮った。

(注4) ケルンの建つ硫黄岳の頂上に出ると、眼前に展開したのは、これから越えてゆく横岳の荒々しい岩峰群と、主峰の赤岳が
作り出す圧倒的な山岳風景だった。あらー、と叫んでしまった。

(1) 「ほんとに行つていいのかなあ」

感動の直後に、こんなところまで来てしまったお調子者の自省の念が腹の底から冷たく湧いた。

何度も読んでほとんど暗記している山と溪谷社発行のガイドブックは、横岳の通過と、赤岳から清里に下りる県界尾根のルー
トに注意するよう教えていた。x 腹はくくつていたつもりだが、実際に目にする横岳は、予想以上の(イ) 険しさだった。

逃げるルートはある。引き返して夏沢峠から本沢温泉に下り、稲子(いなこ)に出てタクシーを呼べば、昼過ぎには家に帰れる。しかし、

そうしたら二度と南八ヶ岳を歩くことはなさそうな予感がした。できることはそのときしておかねば、あつという間に死んでしまふ。そういう声にそそのかされたのと、なによりも、先を行く人たちが登りつつある稜線が、真つ青な空との境にあらがいがたい

I

くつきりした輪郭を描いていた。年配の登山者も多い。

硫黄岳山荘までいったん下り、そこで休憩して、横岳を越えてきたらしい初老の上品な女性に声をかけた。

「横岳、大丈夫でしたか」

「大丈夫ですよ。危ないところにはちゃんと鎖やはしがありませんから」

上品な女性の例に漏れず、きわめて簡潔で、そつけない回答だった。

山では身なり、特に履いている靴を見ると、およそどのくらいの経験の人か見当がつくと分かってきた。これまでたずねる相手の人選を誤ったことはないのだが、あまりの緊張が判断を狂わせてしまい、ベテランを選びすぎたようだ。

仕方なく覚悟を決め、台座の頭まで登って大きく深呼吸してから、垂直に近く切り立った岩壁に渡された鎖にしがみついて横這いし、巨岩にかけられたはしごに取り付き、どこをどうやって通過してきたのか覚えがないまま、横岳の岩峰の中の最高峰である奥の院までたどり着いた。

のどが渇き、唇が上下くつついて、皮をむいてしまわないように水筒の水で湿しながら慎重にはがした。末期の水の連想の芽を、膝の屈伸運動で懸命に摘み取った。

その先の三叉峰から南は以前に來たことがあり、注意すべき箇所も心得ていたゆえ、慎重に進み、赤岳展望荘で休んでから、すでに登頂している赤岳はパスし、急な山腹を巻く県界尾根への近路を取った。

展望荘で紅茶を飲みながら、南側の窓から眺めると、その近路は途中で枯れた草におおわれたまま消えており、先は急な岩壁だった。

路がない。

地図で確認してみたが、きちんと実線で描かれており、いまでも使われているルートであることを示している。マニュアルどお

りの操作をしてもパソコンが思ったとおり作動しないときとおなじで、^z 得体の知れぬ怒りが後頭部を熱くしたから、小屋のアルバイトらしき若者に、

「県界尾根は大丈夫でしょうか」

と、問えば、

「あそこ、ぼくも一度だけ下りたことがあるんですけど、鎖場が急で、ちよつと危ないですよ。死にそんな思いをしたことがあります。できれば美濃戸^{みのと}のほうへ行かれるのが安全かと思います」

誠実そうな若者は^(E) 率直な忠告をくれた。

でも、それでは反対方向で、家にもどるまでに時間がかかりすぎて明日の勤務に間に合わない。そもそも、そんな余裕のない予定を立てたのがいけなかったのだな、こうして初心者^(D)は遭難するのだなと、首を大きく回しながらため息をついていたら、若者が引き返してきて、

「ぼくだけの意見ではなんとも言えませんから、主人に聞いてみてください。あそこにいます」

と、カウンターの横のコタツにあたつてなじみの客らしい老人と話している初老の、眼鏡をかけた男の人を指差した。

この顔はガイドブックの山小屋紹介の欄で見覚えがあつた。それだけに、有名人に会うときの緊張感が II 笑顔を作らせるのが自覚できた。

失礼ですが、とたずねたら、

「きのうもわたしが見回ってきましたが、大丈夫です。鎖をしつかりつかみ、足場をしつかり確保して下ってください」

との、おだやかな回答をいただいた。

⁽²⁾ この答えを待っていたのだ。研修医はいつまでも絶対に死なないための理想論を言い、ベテランの医者⁽²⁾は互いにいずれは死すべき者なのだから、なるべく相手の希望にそうような、できるかぎり長く元気に生存し続けるための III 忠告を与える。最後の責任は自分で取るしかない。どちらを選ぶ、と言われたら後者に決まっている。

それにしても、ベテランの意見も聞いてみてください、と付け加えてくれたあの若者の態度もきわめて正しかったな、と感心しつつ小屋をあとにし、それこそ、自分だけの責任でこんな怖い思いをするのは生まれて初めてで、パニック発作を起こすゆとりすらない、^(付)滑落したら必ず死ぬはずの急斜面の降下に臨んだ。

長い鎖、長いはしご。木が水平に生えている斜面を、五感の感度をめいっばい上げて、^(オ)墜ちないことだけに集中しつつ降下した。死にたくないのではなく、墜ちたくなかった。岸壁の鎖場が終わり、砂礫^{されき}の登山道に出ると、そこも転倒したらずるずる滑落するほど急なのだったが、うれしくて駆け下った。

振り返ると、赤岳、横岳が急峻^{ききうしゅん}な崖としてのしかかるようにそびえており、あんなところを通過し、^(イ)降りてきたのか、と息を呑みながらの確認を済ませたら、いきなり膝が激しく震えだした。

(注) 1 ハケ岳——長野県と山梨県の境にある。文中に出てくる夏沢峠・横岳・赤岳・三叉峰はいずれもハケ岳を構成する山や峰である。

2 槍ヶ岳——長野県と岐阜県の境にある。

3 ヤッケ——防風・防寒用のフード付き上着。ウインドヤッケ。

4 ケルン——山頂や登山路に石を積みあげ、記念や道標としたもの。

5 稜線——峰から峰へと続く線。

問一 傍線部^(ア)、^(オ)の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 空欄Ⅰ～Ⅲにあてはまる最も適当な表現を次の中から一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|----------------------|
| 1 | 実践的な | 2 | 幻想的な | 3 | 無愛想な | 4 | 魅惑的な |
| 5 | 非常識な | 6 | 致命的な | 7 | 不自然な | 8 | 自嘲的な ^{じちよう} |

問三 傍線部 x、y、z の本文中における意味として最も適当なものを次の各群の 1 から 5 までそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

x 腹はくくつていた

- | | |
|---|----------------|
| 1 | 事前に詳しい調べはしていた |
| 2 | 厳しい状況の覚悟はしていた |
| 3 | やり遂げる自信は持っていた |
| 4 | 気持ちを奮い立たせはしていた |
| 5 | 自分の弱点の把握はしていた |

y 上品な女性の例に漏れず

- | | |
|---|-------------------|
| 1 | 上品な女性という外見にもかかわらず |
| 2 | 上品な女性であるという印象は隠され |
| 3 | 上品な女性だとの思い込みが先行して |
| 4 | 上品な女性に特有のふるまいを示して |
| 5 | 上品な女性が一般にそうであるように |

z 得体の知れぬ

- | | |
|---|-----------|
| 1 | 具体的でない |
| 2 | 納得がいかない |
| 3 | 正体のつかめない |
| 4 | まるで筋の通らない |
| 5 | 気を失うほど激しい |

問四 傍線部(1)「ほんとに行つていいのかなあ」とあるが、ここにかがえる心情はどのようなものか。本文に即して句読点と
も六〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部(2)「この答えを待っていたのだ」とあるが、ここにかがえる心情はどのようなものか。最も適当なものを次の中
から一つ選び、番号で答えよ。

1 万が一のことを想定する若者とは対照的な山荘の主人の意見を得て、同じ状況に対する考えの多様性を知るとともに、自分で決定することの重みを痛感している。

2 若者のように個人的な見解だけを述べるのではなく、現状の客観的な把握に基づいておだやかな調子で回答する山荘の主人に感心し、人間的な魅力を感じている。

3 県界尾根は避けるべきだと言う若者とはうらはらに、楽観的な見通しを示した山荘の主人の言葉にかえって尾根の危険性を感じ取り、身の引き締まる思いでいる。

4 若者が機転を利かせて紹介してくれた山荘の主人が述べる山登りの理想論に共感し、多少の危険を冒すことになっても悔いを残さない行動をしようと思っている。

5 若者が紹介してくれた山荘の主人から長年の経験に裏打ちされた適切な助言を得ることができたことに感謝し、予定通りの道を行こうとの思いを新たにしている。

問六 波線部①～⑥の表現について説明したものとして適当なものを次の中から二つ選び、番号で答えよ。

1 ①は、あたかも身体の一部がそれぞれ独立した動きをしているかのような表現で、短い文を淡々とたたみかけることにより、はやる気持ちをおさえて冷静さを保とうと努めるさまを表している。

2 ②は、あえて大げさな身ぶりをすることで、我が身に死が迫り来つつあるのではないかという不吉な連想を必死にぬぐい去ろうとしている様子を、擬人法を用いてユーモラスに表現している。

3 ③は、地図上では実線で描かれ、存在しているはずのルートがないことを知った時の驚きを簡潔な文で端的に表し、さらに読点を挟み込むことで、途方に暮れる内心を効果的に表現している。

4 ④は、県界尾根が危険であるという全く予期していなかった事実を若者から知らされ、頭の中に遭難という二文字がちらついて不安に駆られている心情を、身体的な動きに託して表している。

5 ⑤は、自らの意志で来た道とはいえ、体験したこともないような急斜面を降下することへの恐怖と緊張が極限にまで達

し、放心状態に陥って生きた心地がなくなっている様子を表している。

6 ㊦は、歩いてきた山々を見上げて無事に降下できたことを確かめ、胸をなで下ろすとともに急峻な山々の危険さにあらためて思い至り、今さらながら恐怖心を抱いているさまを表現している。

Ⅲ 次の空欄にあてはまるように後のア～エから語を選び、四字熟語を完成させ、またその意味と最も近い内容の文を後の a～g から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1	不言	
2	我田	
3	用意	
4	異口	

【語句】

ア 同音 イ 実行 ウ 周到 エ 引水

【意味】

- a 今年の水不足で稲の生育は不十分であった。
- b みんなが勝手な話ばかりしているので少しも意見がまとまらない。
- c なかなかりっぱな話をしていると思っていたら、結局は自慢話になっていた。
- d 彼は元来無口な男だが、やるべきことはきちんとやる男だ。
- e 先生の提案にほとんどの人が反対した。
- f 吹雪はすさまじい勢いで荒れ狂い、装備が不十分な兵士たちは次々と倒れていった。
- g 彼はテストを受けるときは、いつもちゃんとした準備をしてくる。

IV 次の1～5の対義語はどれか、それぞれア～エから選び、記号で答えなさい。

1 賛成

ア 成功 イ 反省 ウ 反対 エ 賞賛

2 損害

ア 利子 イ 利益 ウ 害悪 エ 損得

3 自然

ア 天然 イ 人工 ウ 文明 エ 物質

4 否定

ア 決定 イ 確定 ウ 肯定 エ 予定

5 過失

ア 欠点 イ 故意 ウ 美德 エ 補償

V 次の1～7の文は、いずれも慣用句を含む文である。空欄に適当な言葉を書き入れなさい。

1 失敗を注意されて耳が□。

2 あき果てて□の句がつけない。

3 先生の言葉を□に銘ずる。

4 寝耳に□の事件。

5 彼女の記憶力には舌を□。

6 彼は□の他人です。

7 すっかりいやになって□を投げる。

令和二年度 一学期 高等部一年 国語 実力試験 ※提出先↓濱野先生

【解答用紙】

〔組〕〔番氏名〕

U

[illegible]

Ⅱ							
問六	問五	問四			問三	問二	問一
					x	Ⅰ	(ア)
					y	Ⅱ	
				z	Ⅲ	(ウ)	
							(エ)

III	1		
	2		
	3		
	4		

IV	1	
	2	
	3	
	4	
	5	

V	
5	1
6	2
7	3
	4